

東北大学100周年記念セミナー

紙面報告⑥

科学が次の100年で創りだせること

第6回

文明の危機とグローバルコミュニティの再生

8月2日、第6回「東北大学100周年記念セミナー」が日経ホールにて開催されました。約600人の参加者による満席の会場のなか、最先端研究にかかわる前線の熱気あふれる講演が行われました。

グローバルコミュニティの再生のために、何ができるのか。

近年のグローバル化によって、人類はかつてない量で便利な生活を享受しています。しかしその反面、現代ビジネスや人々の日常生活を支えるグローバルなインターネット網は、ハッカーの攻撃によって寸断される危険にさらされています。また、いったん環境汚染・感染症・大規模災害が発生するとその被害はすぐに国境を越えて拡大します。さらに、大量の武器や麻薬の国際取引の結果、多くの生命と健康が失われています。その意味で、現代社会はこれまでにない脆弱(ぜいじゃく)化しており、人類文明は危機にひんしているとの見方さえあります。今回のセミナーでは、大規模災害、BSE、新型ウイルス感染症、対人地雷、ハッカー攻撃に立ち向かい、また、天体としての地球の国際共同観測を通じて美しい地球を取り戻そうと奮闘する東北大学の研究者6人が、最先端の研究成果を基に、グローバルコミュニティ再生への道について講演しました。



東北大学 教授 北本賢之

「地球規模大災害と国際協力 ～インド洋津波から見えるもの～」 東北大学工学研究科附属災害創発研究センター 教授 今村文彦
2004年のスマトラ沖・インド洋津波は、歴史上最悪の被害をもたらした。津波の規模が大きかったこと、情報システムがなかったこと、津波の伝承がなかったことなどが要因に挙げられる。

「グローバル化とヒトBSEの脅威」 東北大学医学系研究科 教授 北本賢之
BSE(牛海綿状脳症)由来のパリアント型ヤコブ病(ヒトBSE)の汚染が水圏下で拡大しつつある。ヒトBSEの感染性は非常に強く、髄液・移植などの医療行為を介しての2次感染が新たな脅威となりつつある。

「国境を越えるウイルス感染症 ～鳥インフルエンザと地球規模大感染の危険性～」 東北大学医学系研究科 教授 岸谷仁
鳥インフルエンザA(H5N1)による感染は拡大を続けており、ヒトでの感染も起きている。ヒトからヒトへと容易に感染するウイルスが現れる可能性が指摘されている。

「プラスチック地盤を見つめる地盤技術 ～先端テクノロジーによる地盤改良～」 東北大学東北アジア研究センター 教授 佐藤道之
地盤を除去する人工的地盤改良が注目されている。現在利用されている金属探知器による地盤検知は作業効率が低い。東北大学では金属探知器と地盤を画像化するGPR(地中レーダー)を組み合わせたハンドヘルドセンサーを開発した。

「グローバルネットワークの光と影 ～ハッカーとの狭くなき闘い～」 東北大学情報科学研究科 教授 板元倫幸
すべてのヒトとモノが時空を超えて、情報の交換が可能となるグローバルネットワーク社会へと進展し、その恩恵を享受することで人類はより豊かになる。一方で、ネットワークを攻撃する不正アクセスの悪化は、人類共通の課題である。

「オーロラから見る地球の未来 ～進展する国際宇宙共同観測～」 東北大学理学研究科 教授 藤西浩
オーロラは地球だけでなく、激場を持つ惑星では必ず出現していることが判明した。持続可能な社会の実現のためには、地球とそれを取り巻く宇宙空間を結合した一つのシステムとしてとらえ、解明していく必要がある。

東北大学100周年記念セミナー 第7回
「喜れる子、無気力な子、挫折する子 - 親の力、教育の力、社会の力を考える -」
特別講演: 内館牧子(脚本家)
日時: 2007年1月13日(土) 13:00~17:00(開場12:30) 会場: 日経ホール(東京都千代田区大手町)
主催: 東北大学・日本経済新聞社
問合せ先: 東北大学総務部100周年記念事務局 仙台市青葉区片平2丁目1-1 TEL.022-217-6059

第6回100周年記念セミナーと、次回セミナーの開催はこちらをご覧ください。 www.tohoku.ac.jp/seminar100

2007年に、東北大学は創立100周年 独創性を豊かに育む学生生活がここにある。



TOHOKU UNIVERSITY

サークルで培われたオリジナリティー 重視の姿勢が、今の研究に生きている。

(鈴木哲也教授)

鈴木先生の研究室で学びたい、という思いから、2003年に社会人特別選抜試験を経て入学。3年間仙台に住み、大学生生活を体験した内館さん。05年には相模原の監督に就任し、卒業した今でも、東京と仙台を往復する日々が続きます。一方の鈴木教授も学生時代にアドベンチャークラブという、いわゆる探検部に所属。そこでの体験は「自分の宝物」と言います。今回はそのふたりが、学友会やサークル活動を通じて東北大学の学生生活をそれぞれの体験から語り合いました。

今なお受け継がれる、オリジナリティーの精神

鈴木教授が学生時代に所属していたアドベンチャークラブ。普通の人が行かないところから山を登ったり、河原(せうく)の地図をつくらたり、東北地方で初めてハングライダーを飛ばしたのも私たち」と、充実した学生生活を送っていたようです。そして「他人と同じことをしたら相手にされない、ということをしたがらなかった」「研究室で研究への姿勢を教わったように、もうひとつの柱としてサークルで社会との接し方を学んだ」と、当時の体験を鈴木教授は「今でもほくの宝物」と語ります。それを内館さんは「今の研究室も同じ」として「オリジナリティーがない時は、もう四方八方から攻撃されます」と、鈴木教授が体験した独創性をほくくも環境が、今なお東北大学に受け継がれていると指摘しました。

復活劇を演じて、大きく成長した部員たちはわずか4人。とにかく、ひとり3人ずつ集めてこよう。そんな勇躍寸前のところから始まった相模原も、今では20人を超え、徐々に成績を残せるようになりました。鈴木教授の「学生



新設した土上で指導する内館さん

復活劇を演じて、大きく成長した部員たち

東北大学には、ローマオリンピックに出場したボート部や、ニエンチエンタラの初登頂を実現した山岳部、本年では、鳥人間コンテストでマインドノーツが一位になるなど、数々の頂点を極める学友会やサークルなど、学生生活を通じて日々、多様な才力を育む環境があります。

「イカトン」たちが築いた、研究環境

内館さんは東北大学の学生生活を「濃い」と表現しました。「授業も人間関係もすごく濃くて、なににうつつなく、むしろ心地良い」。鈴木教授はそれを「イカトン」という言葉で説明します。「この言葉は本来、いかにも東北大、の略で、素朴でタチいことを意味する。でもそれは逆に他人に迎合せずに自分の直感を大事に育てる気風とも言える」と。そこには他人をけがれと競争心ではなく、純粋な好奇心に満ちた研究環境があります。「流行を追うのではなく、自分が本当にやりたいことをやる。他の人が考えないような視点からね」。鈴木教授は「それが東北大学の特長かな」と語りました。

東京では体験できないことばかり。ものすごく得した気分です。(内館牧子さん)



内館牧子

脚本家。2000年より日本相模原会の代表理事。03年、東北大学大学院文学研究科修士課程の社会人特別選抜を受験。「土壌という領域」をテーマに博士号を専攻し、08年に修了。06年より東北大学相模原監督に就任。06年より秋田県立法政大学客員教授を務める。

鈴木哲也

東北大学文学研究科教授。専攻は日本文学、東洋学、比較文化学。博士号取得後、学術を切り口にした人間学研究を行う。現在はアジアを視野に持つ。変化の激しいとされる現代日本人の再生論や、戦後とは多少ズレて形成される日本人の民間信仰の解明などを担当している。



TOHOKU UNIVERSITY, CREATING GLOBAL EXCELLENCE

～ 東北大学は世界最高水準の研究・教育を創造します。～

広告

企画・制作＝日本経済新聞社広告局